



吉田榮三郎のいひ

大江良太郎

感激屋で猪突癖のある花柳章太郎が吉田榮三に私淑して親交を温めだしたのは、いつ頃からだつたらう。餘り古い話ではない。

新生新派が大阪へ出向くと南のいとう、旅館を常宿とし、私も其処へころがりこんでゐた関係で、花柳夫人から朝茶の振舞いを受け、こんがり焼けた鹽煎餅を賞味するのを例とした。この煎餅たるや章太郎の好物と知り、榮三老が手づから焼いて届けてくれたものと聞いた。程よいこげ方の、程よい醬油加減を味ひながら、老夫婦さし向ひで身寄りのない藝の人が、炭火を圍む情景に私は想ひを馳せたものである。

四ッ橋の樂屋、東之町の榮三宅……文樂東上の際

は柳橋の花柳家で、私も再三ならず藝談拜聴の相伴役に侍つた。嗜好の杯をふくむにつれて謹嚴の相が眼尻の愛嬌の中に親しくほぐれてくると、せがれと呼び、をやじと應えだす。吉田榮三は離れて観る名人でもあつたが、就いて聴く藝の虫でもあつたと思ふ。その都度よく青年榮三郎は傍にゐた。そういへばい、どう旅館に饅入れの鹽煎餅を持参した使者も愛弟子の榮三郎だつたやうな氣がする。

私が吉田榮三郎の名を知つたのは三宅周太郎氏の「文樂座の少年軍四人」に據つてである。榮三郎といへば故尾上榮三郎の名を聯想する。「金閣寺」の雪姫で由緒あるその名を襲ひ、囁望を擔いながら若くして臥れたその人を、私は眞辰だつた。「六段目」のお軽で六代目の袖手役に及弟し、「伊勢音頭」のお紺を豫約して果さず、湘南の病床に逝つた薄幸の藝名に、私の愛情が通ひ続けてゐたともいへる。備中倉敷町の生れで子供の時から遊藝が好き、十五歳で人形淨瑠璃の苦業に身を置き、榮三の秘藏弟子として「水浅葱の襦袢の袖をちらつかせてゐた」とある榮三郎に、後年知己を得て修練の舞臺を注視するやうになつてから、私は紋十郎と巢立ちの違ふ女形遣ひの將來性を期待したりした。

栄三の舞臺

忘れもしない昭和十九年十二月三十日……空襲警報に幾度か緊張の体験を積んだころ、翌年新春の南座を新生新派であけるべく、前晚私は京都駅に着いた。と、映画撮影を終へてそのまま滞在中の花柳章太郎が、翌朝文樂座の舞臺稽古を觀に行こうといふ。こうした事態になるといつ如何なる情勢にたचितらなとも限らない。愛着の文樂を鑑賞するの今のうちと、いささか悲壯な氣持になつて疲労を忘れ、大阪ゆきに賛同した。卷ゲートルに防空頭巾、二食分のおにぎり持参での古典見学だつた。

朝の十時から夜の十時半まで、それこそ貪慾に私は猛稽古の舞臺へ注視を送つた。隣席には古靱、栄三の監視が光つてゐた。幕間になつて老体から招かれ、二人は樂屋で又しても藝談を聴取した。栄三老は小さな角火鉢に消し炭をつぎ、火吹き竹で窪んだ頬をふくらませながら、いそいそと遠來の私達に申し餅を焼いてくれるのであつた。そのとき側で弟子の光造と栄三郎が「壽式三番叟」の人形衣裳に手を入れてゐた。師匠は熱と氣と品で使ふ三番叟氣味合いの要點を機嫌よく教えるのだつた。當夜「寺子屋」の松王に満ちあふれた氣魄の逞しさを今更のよりに思ひ出す。腹に一物、車輪の訴え方をしてくれ

たのであろう。新進栄三郎は拔擢されて戸浪を使つてゐた。神妙だけなら贅言を要しない。栄三一門の自實を知る藝魂の浸透が、覺醒の意慾となつて栄三郎の戸浪にちらつてゐたのである。その躍動を私は嬉しくみてとつた。花柳章太郎も同感だつたらしい。凍る月影踏んでいとまを告げたとき、玄關まで送つて來た栄三郎の肩を軽くたたきながら、激励の言葉贈つてゐたほどだから……。

元旦初日であけたその「寺子屋」を打ちあげる頃から戦局愈々逼迫した。二月は休演、三月十三日の空爆で大阪と運命を共にし、四つ橋文樂座も焼失の厄に逢つた。そして感激の松王が吉田栄三を偲ぶ私の終止符となつてしまつたのである。

戦争をさまつて犠牲の大きかつた文樂座も幸先きよく更生した。まづ他の大阪劇場にさきがけての居城竣成である。合せて櫓下古靱大夫の豊竹山城少掾受領である。二十二年五月六日……私は三年ぶりでなつかしい文樂座の客席を占めた。殆ど昔と変らぬ新装で、掾號拜領の記念と合せ、織太夫改め竹本綱太夫、團六改め竹沢彌七の襲名披露まで兼ねてのお目出度公演であつた。新緑薫風の寶塚に宿をとつて早速地下鐵心斎橋下車の四つ橋通り……開演を待つ間、番付を繰りながらも、クンと栄三なき想ひが胸



にせまる。それにしても弟子の榮三郎は?……旧知をもえば役名を探したくなる。その日は昼の部大隅の「伊賀越」でおよねを、そして夜の部切狂言掛合の「双草紙」で驚娘を使つてゐた。一應身分のたつ登場といへるだらう。

東路から千本松までの「沼津」は私の好きな狂言である。「前垂の藍薄くとも、マアお茶一つ」のあたり、「せせなげに咲いた杜若」のおよねに、人形なればの独自の陶醉を覚えさせられるのである。

好きな役を好きな人が使ふのだから師匠なきあとの緊禪一番を期待したとて身勝手とはかりはいえなからう。ところが久闊で對面の吉田榮三郎だが、その役の何処が拙く、どこに躓きがあつたわけでもない。それこそ神妙に、手がたくおよねを使つてゐた。が、氣魂である。霸氣である。躍込である。こうした創造と表現面の精神力に惜げかへつてゐるものを感じた。あの若さで、あの立場で消極的に低迷されてはこまる。なるほど吉田榮三の逝去は一門にとつて大黒柱の挫折だつたかもしれない。ことに藝界の樂屋裏では突支い棒なくして風當りの冷くなつたであらうことも想像されなくはない。だからと言つて此処が油の乗りどころまで来て、息が続かなくなつては亡き師匠に對しても申し開きがたたなから

う。寂寥の感が私の樂屋訪問を躊躇させてしまつた。

新秋文樂座の東京引越公演は待望久しかつた理由もあつて、大変な前景氣のもとに開場された。酷使のうらみはあつたものの山城少掾の敢闘は、圓熟の藝を客席に納得させてくれたといへる。清八の三味線も今度連続に聴いて漸く妙味を味ひ得たような氣がした。松太夫、浜太夫、越名太夫等の進境がめだつてきたのも嬉しいことだつた。

文樂三業のうち、現在三味線に霸權のあることは誰しも認めるところである。太夫の方にも曙光の兆があるとするれば、惰人形は? といふことになる。見渡して一角の寂寞を感じるのも無理がない。旧知の榮三郎よ、せめて心の健康を回復してゐてくれと、私は東劇の一隅から祈つた。「重の井」の腰元お福、「新口村」の龜屋忠兵衛、そして二の替り「團子賣」のお白、「寺子屋」の戸浪……やはり氣力が沈滞してゐた。四年前、榮三の膝下で緊張を示した頃の生彩が感じられなかつた。同じ戸浪との對面故に、こと更痛切に響いたわけだらう。「堀川」の井筒屋傳兵衛を観るに及び、孤独で自棄的な陰影が潜んでゐる氣さへしたほどである。

榮三郎の内攻型だつたことは私も知つてゐた。彼



は決して喜怒哀樂の感情發散派ではなかつた。それだけ温厚無口、ひかえ目で淡泊になれない性格の持ち主だつたと思ふ。が、相當の意地張りのように考へられる節もある。つまりは表面抑えるものがあつても内心我儘な弱虫で、自分から自分に挑戦する捨て鉢な氣分もあつたのではなからうか？ いづれにせよ根は善人だつたに相違ない。善人なればこそ内攻してゐたわけだ。彼は酒をたしなんだらしいが、酔態をみせたがらなかつたといふ。素面になつて氣分に酔えぬ榮三郎……これで總てが解るではないか。

全く急だつた。東京を打ちあげて大阪へかへり、いくらもたない時に吉田榮三郎の逝去が傳へられた。

丁度その頃、私達歌舞伎愛好のグループで東京劇場の藤宮せいさんを圍む会席を持つた。といつたところで改まつたものではなく、明治座以來なかにと觀劇の都度知遇を得た人に、感謝の意を表したい集ひに過ぎなかつた。藤宮さんの芝居を誇る誠意に打たれた者は少なくなからう。芝居を愛するがため芝居に親しむ連中へ厚意を示す彼女である。現に東劇樂屋を宿舍となる関西の出演者など、たくまざるこの人の誠意に逢つてゐる事と思ふ。

談たまたま好評の文樂に移り、吉田榮三郎の早逝を悼む話題に展開した。

彼女の語るところによれば人形淨瑠璃の一黨揃つて東劇に宿泊中、近所の子供達が毎日のやうに榮三郎の部屋へ遊びに来てゐたといふ。どんなキツかけでどう仲良しになつたかは知らないが、日曜は朝から、平日は学校のひけ時から腕白連が押しかけて来る。榮三郎も客筋へ顔出しに行く様子もなく、一人樂屋に蟄居しては満足氣に相手役をしてゐたそうだ。

と、文樂終演、一同帰阪、數日たつたあと、例の子供達が藤宮さんを訪ねて來た。榮三郎おじさんへ皆で手紙を書いたから送つてほしいとの申し出だつたとある。

「私も可愛くなつて早速引き受けましたがね。手紙をみたら皆絵入りで、築地本願寺の寫生なのですよ。氣がさしました。フツ子供達が夕餉にかえつてから一人ボツネンとしてゐた榮三郎さんの寂しい姿を思ひだしたりしまして……」

目をうるませて彼女は語り終つた。因縁ばなしではない。が、この話を聽いて私は吉田榮三郎の性格をハツキリ知り得たやうな氣がした。そして心中一人で合掌した。